vinetur

高温と干ばつでトスカーナの2026年ブドウ収穫量が減少

度重なる熱波でブドウの房が小さくなり、サンジョヴェーゼの成熟が早まった。トスカーナでは収量が減った一方、品質は高水準となった。

2026年11月18日（水）



フィレンツェ農学士会の会長によると、長期にわたる高温と干ばつにより、特にサンジョヴェーゼが例年になく厳しい生育期を過ごした結果、トスカーナの2026年のブドウ収穫は品質が高かった一方、収量は減少した。

11月17日（火）に発表されたコメントで、フィレンツェ農学士会会長のミケーレ・ペラガッティ氏は、地域全域の生産者が収穫量の減少に直面し、トスカーナで最も重要な品種の収穫時期は大きな試練となったと述べた。同地域の主要品種であるサンジョヴェーゼは、近年より早い時期に到来し、より長く続いた度重なる熱波の影響で、栄養成長のサイクルを例年よりかなり早く終えたという。

ペラガッティ氏は、トスカーナのワイン産業は生産面で複雑な局面にあると説明した。同地域で長年続いてきたブドウ栽培への適性は、ここ数年の夏を特徴づける急激な気温上昇によって脅かされているという。同氏によると、かつてブドウ樹が高温ストレスを受けるのは主に7月と8月の数週間に限られていた。近年はその時期が6月にまで早まり、2026年には極端な高温がほぼ途切れることなく続いた。

高温に加え、蒸し暑い夜が続き、ブドウ樹が十分に回復できなかったという。この状況に、9月上旬まで続いた雨不足が重なり、ブドウの房の平均重量が大幅に減少した。房が小さくなったことで生産量は減った一方、果実の健全性は保たれたと同氏は述べた。

ペラガッティ氏は、2026年を近年で最悪の収穫年とみなすべきではないとしながらも、香気成分とフェノール成分が成熟する繊細な段階で、ブドウ樹が受ける負荷を最も明確に示す年の一つだと評した。果実の分析値を慎重に管理する必要があったため、ワイナリーは醸造所で細心の注意を払わなければならなかったという。

シーズンがあらゆる面で悪かったわけではない。ペラガッティ氏によると、高温により近年のワイン生産期に影響を及ぼしていた多くの病害虫を抑えやすくなり、2026年は植物衛生面で最も健全な年の一つとなった。また、降雨のパターンに応じた精密なブドウ畑管理も必要だったという。4月の春先は雨が多かったが、その後の数カ月は降雨の頻度こそ低かったものの、一度に大量の雨が降った。先を見越した管理を行っていたブドウ畑では、こうした激しい降雨の後も適切な時期に対策を講じることができ、土壌侵食や締め固まりを抑えるのに役立った。

同氏によると、厳しい気象条件は早期収穫で特に顕著だった。その後、9月中旬の雨が予想外の救いとなり、樹上に残っていたブドウはバランスを取り戻し、目に見えて状態が改善した。こうした傾向はサンジョヴェーゼや歴史ある産地に限られなかったという。トスカーナの他の赤ワイン用ブドウ品種や白ブドウも気候変動の影響を受けたが、生理的特性や醸造の目的によって反応は異なった。

デジタルツールはすでに、生産者の適応を支援しているという。病害の発生リスクを監視する意思決定支援システムは、植物保護対策をより的確に行うのに役立ち、栽培農家のコスト削減にもつながっていると同氏は述べた。

ペラガッティ氏は、気候面で再び厳しい年となったなか、トスカーナのブドウ栽培農家とその相談にあたる農学者が適切に対応したと評価した。収穫量は減ったものの、2026年産トスカーナワインの品質は非常に良好になる見通しだという。

飲料業界にとって、今回の収穫は一季にとどまらない、より広範な課題を示している。主要ワイン産地で収量が減り、成熟が早まれば、高温と干ばつの傾向が続く場合、とりわけサンジョヴェーゼ主体のワインについて、生産者はブドウ畑での栽培方法や収穫時期、供給計画の見直しを迫られる可能性がある。ペラガッティ氏はまた、こうした条件への対応に必要な労力に見合う報酬を生産者が得られるよう、ワイン市場は今、バランスを取り戻す必要があると述べた。